
第Ⅰ期　棚を家具的に利用し緩衝帯として交流する空間


第Ⅱ期　家具的空間から居場所へと変化し、上下階のつながりを構築


第Ⅱ期　既存の空間の区切りをわずかに感じ、視線の抜けた空間となる


第Ⅱ期　2階床が減築されたことによる開放性の獲得


第Ⅰ期　解築で余った部材をストックする木小屋

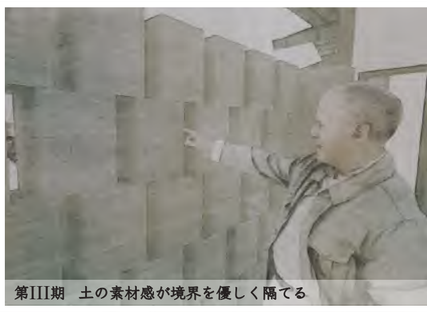

第Ⅱ期　既存の土間の機能を超えたコミュニティ形成

空き家の切継

―段階的解築操作が施す古材の延命―

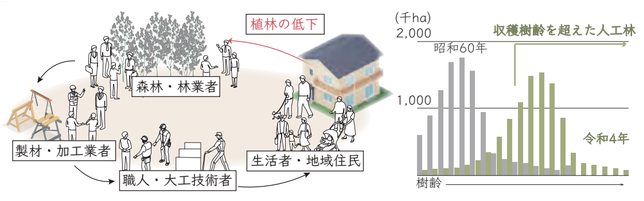
今、木材は人々に欠かせないものとなっている。戦後適切な植林が行われなかったため、今後、現在のように安定した木材の供給は見込めない。そこで炭素ストックの役割を果たす木造に着目した。空き家となっても完全に解体はせず段階的に解体することによって、木造自体の寿命を延ばし植林と同等の役割を果たしていく。
対象敷地は木材において地域全体が循環に浮かぶ神奈川県小田原市。空き家密集地であるかまぼこ通りでは空き家の有効活用が進んでいるが、新材のみを使った改修に留まり、その時発生する古材は廃棄されている。そこで発生する古材を使い、転用する「切継」という操作を段階的に行うことが、古材の寿命を最大限伸ばす「解築」の在り方である。


第Ⅲ期　版築ブロック壁間の隙間から視線を感じる


第Ⅲ期　土の素材感が境界を優しく隔てる

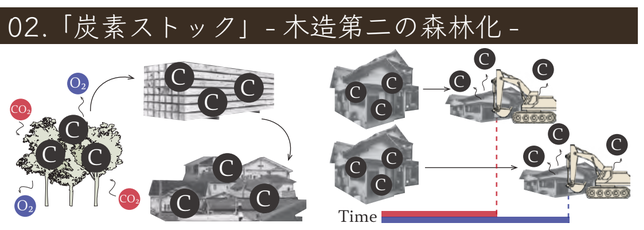

第Ⅰ期　格子の奥行性を生かし、路地から生活の気配が伺える

01. 森林の少子高齢化 - 木材供給の危機 -



木材の循環において森林資源は豊富であったが、戦後適切な植林が行われなかったため森林の少子高齢化となり、今後、現在のように安定した木材の供給は見込めない。

02.「炭素ストック」- 木造第二の森林化 -



森林の木々は、光合成によって炭素を貯蔵する装置として機能している。木造は第二の森林となるが、使われなくなった空き家などは解体され、炭素が放出されてしまう。空き家になっても可能な限り長く使ってあげることで、炭素をより長くストックさせることができる。

03. 敷地 神奈川県小田原市本町



人口総数	187347
高齢化率	30.5%
空き家率	14.4%





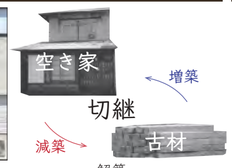
面積の約４割が森林で占める小田原市は、高齢化等の背景から中心市街地でも空き家が増加傾向にある。しかし地元の木材を使い「暮らし」等に活用する「木育」が促進されており、日常から木との接点を持ちながら「森と街をつなぐ」新たな循環として空き家 × 木材活用のモデルに着目した。


第Ⅰ期　土間が拡張され居間と外部との空間が緩やかにつながる

04.「切継」- 古材の延命 -

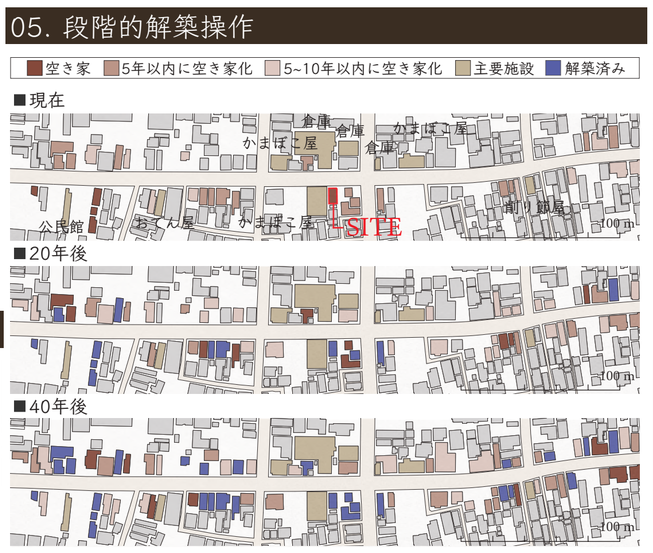

改修前の蔵


新材による改修



小田原のかまぼこ通りでは空き家の有効活用が進んでいるが、新材のみを使った改修に留まり、その時発生する古材は廃築されている。木造自体の部材を転用し古材の寿命を最大限伸ばす「解築」という行為が、炭素ストックの長期化へと繋がっていく。

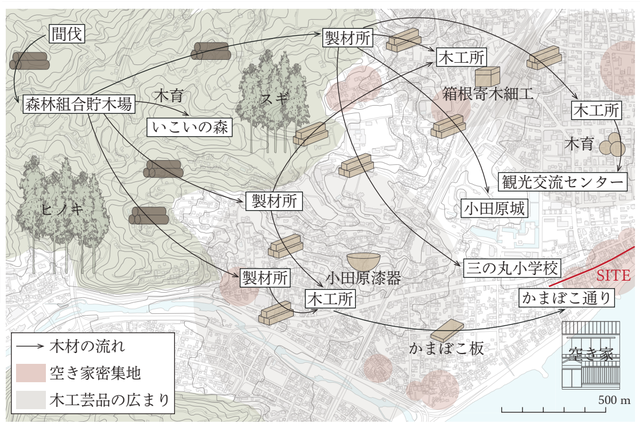
05. 段階的解築操作

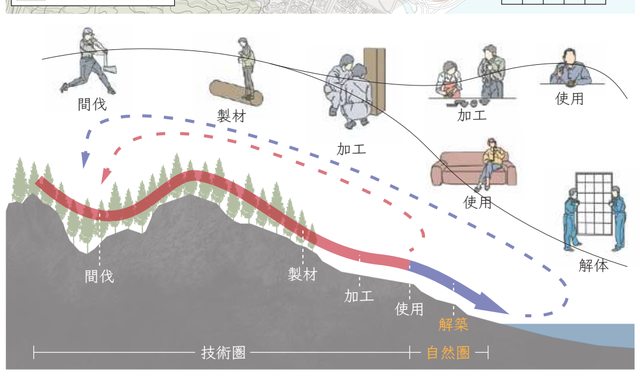


本提案はかまぼこ通りの一軒の住宅に焦点を当てる。段階的に解築操作を行うことで、かまぼこ通り全体が炭素ストックとなり、第二の森林となる。


第Ⅱ期　床の間の痕跡を感じつつ、機能を継承する

06. 小田原の地形と事物連鎖・循環性

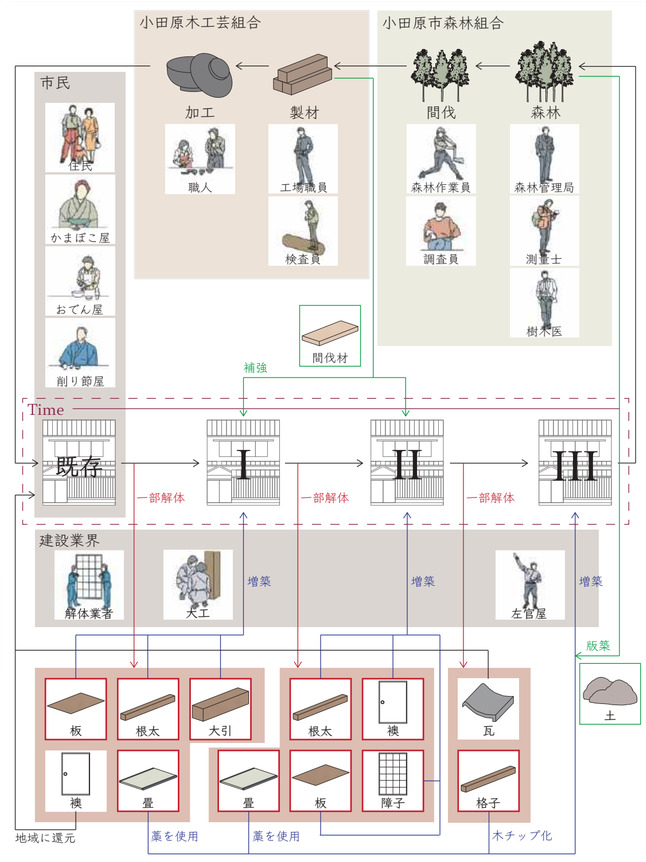




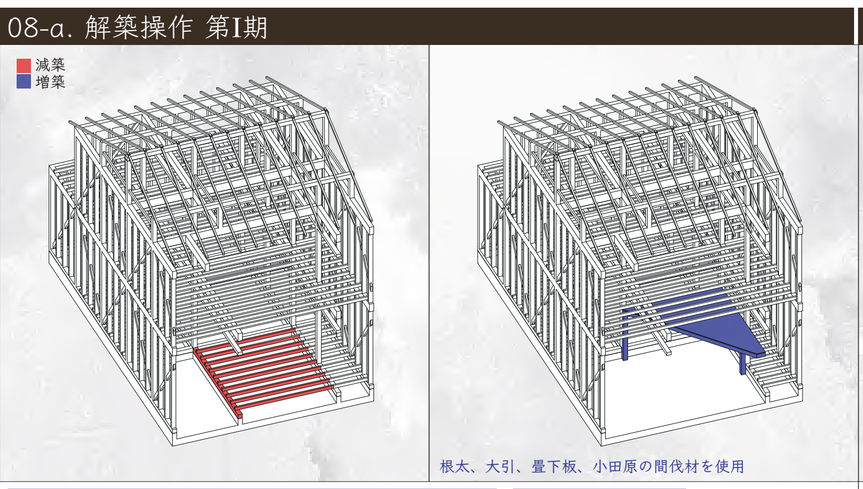
小田原はまちの４割が森林であり、川上で木材を生産して、川中で加工して、川下で使う、「木づかい」の文化が育まれている。そこに「解築」が加わることにより、技術圏だけでなく自然圏も巻き込んだ循環となる。


第Ⅲ期　庭として再編した空間は緩く外部とつながる

07. 人と部材の循環ネットワーク

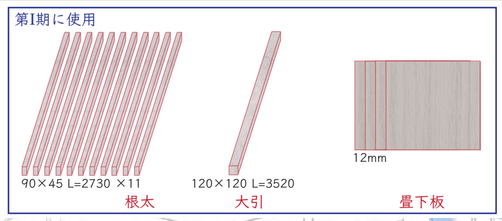


08-a. 解築操作 第Ⅰ期

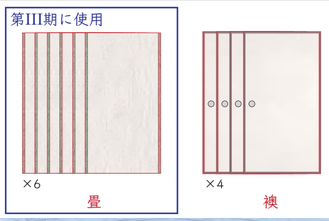


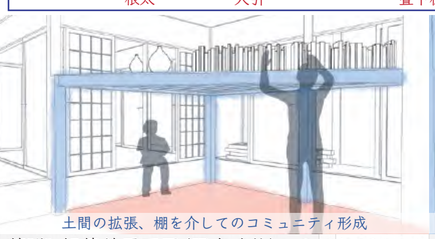
根太、大引、畳下板、小田原の間伐材を使用

第Ⅰ期に使用



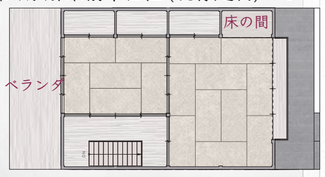
第Ⅲ期に使用




土間の拡張、棚を介してのコミュニティ形成


解築で余った部材は解築資源として木小屋にストック

第Ⅰ期 解築前平面図 (既存建物)　S=1/150

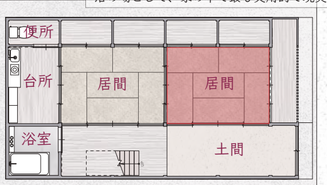


第Ⅰ期 解築後平面図　S=1/150



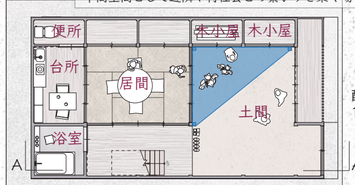
居間の減築
現状老朽化が進み、使われない居間。居間の減築により空間の密度が上がり、活動の幅が拡張される。

既存の土間
屋外と室内の緩衝帯としての役割をもつ。日常的な生活の場として、家の中で最も実用的で現実的な空間。



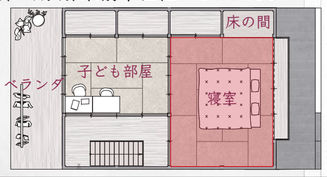
木小屋
押入れとして機能していた一部を痕跡を残しながら木小屋として再編。解築の過程の中で、余分な部材をストックする場。次の解築操作や地域への還元材として大きな役割を果たす。

1.5 階の増築
拡張された土間空間に 1.5 階の増築を行う。家具的な役割を居間・土間の双方からアプローチでき、サードプレイス的な中間空間として近隣や村社会との繋がりを築く場となる。

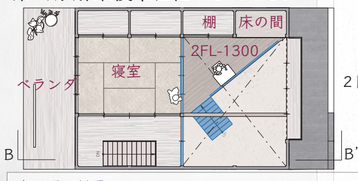




第Ⅱ期 解築前平面図　S=1/150

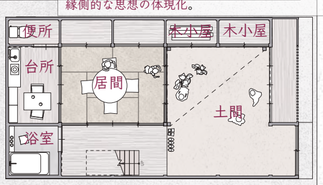


第Ⅱ期 解築後平面図　S=1/150



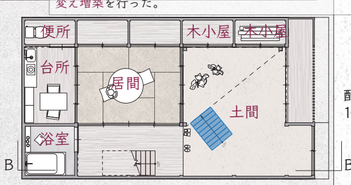
2 階の減築
老朽化し使われなくなった 2 階の床を一部減築。土間に開放感を与えるとともに解築第Ⅰ期にて増築した部分が居場所として再編される。

居間の開放化
室内のみに活動が留まっていた居間。柔軟で開けた空間に変わることで境界を曖昧にし、暮らしと社会や人と人を繋ぐ緩衝的な思想の体現化。



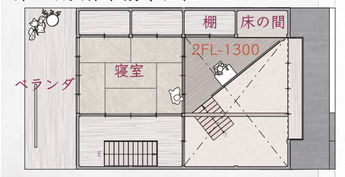
床の間の継承
和室の中心であり礼節の場でもある床の間。床の間の価値を損なわないように解築時に除去せず、モノを飾るための額縁のような存在であり、静けさや品格を宿す場所として継承する。

障子・襖による上下の関係性
2 階減築前は障子として空間の仕切りとして役割を果たしていた。吹抜けにより上下階の関係性を構築するため障子のスケール感を変え増築を行った。





第Ⅲ期 解築前平面図　S=1/150



第Ⅲ期 解築後平面図　S=1/150

1.5 階の利用
解体された部材で増築された階段により 1.5 階も居場所となる。解築以前の空間を継ぎつつ住民・地域の人との繋がりを構築する。

格子の減築
居場所化せず視線のみに留まっていた格子による既存形態。格子の持つ壁や扉ほどの厳密に空間を区切らない効果を継ぎつつ居場所化を図る。

版築ブロックの活用
解築第Ⅲ期においては、地域の土と解体部材で得られたワラ等の部材で版築ブロックを形成し、木材を長い時間軸で使い続けることができる可能性を示すとともに地域の資材のみでの循環に成功しているため地産地消的な解築操作である。

庭として再編・居場所化
既存の格子により居場所化していなかった空間を減築と版築による増築操作により居場所化。格子の持つ緩やかに空間を区切る点や光の陰影、風の通り道を確保し、解きながらも継承していく空間。

第Ⅰ期 A-A'断面図　S=1/100

1.5 階の家具的利用
解築第Ⅰ期にて解体された部材から増築された 1.5 階は土間と居間を繋ぐ緩衝帯の役割をはじめ、ワークショップなどの開かれた交流空間を支えるツールへと変換される。

土間の拡張
機能面では作業場や物置等の多目的スペースとしての役割に留まっていた土間空間に対し、減築と同時に土間の拡張へと繋げ、屋外でも室内でもない「半分開かれた場」として応用。

第Ⅱ期 B-B'断面図　S=1/100

障子・襖の減築・増築
採光性や間仕切りとしての障子を減築と増築の操作を行い、1 階・1.5 階・2 階の上下関係を構築した。既存の形式を崩さず解く作法や歴史性と機能性を兼ね備えている。

木小屋による素材ストック
解体された部材は全て古材として次の解築操作に転用せず、余分な部材は木小屋に地域の潜在的資源としてストックする。廃棄される予定の古材が地域の資源としてストックされることで、周辺の建築物の解築操作に還元が可能である。

第Ⅲ期 C－C'断面図　S=1/100

床の間の再編
床の間は空間の格付けにおいて高い位置にあるため解築によって減築は行わない。床の間の痕跡を残し、現代的な美意識と共存できる設え場として再編していく。

版築による解築作法
既存の格子の空間を解体後も版築を用いることによって再編。版築ブロックとして解くことで格子を通じて感じる奥行き感を継ぎ、地域資源の還元と全体の循環へと繋げていく。

代表者 向井伊吹　rubato0228@icloud.com